

辻村明／D・L・キンケード 編
中島純一 訳
異文化理解のパラダイム

コミュニケーション理論の 東西比較

Communication Theory
EASTERN AND WESTERN
PERSPECTIVES

日本評論社

1990 Japanese



日本評論社

EASTERN AND WESTERN PERSPECTIVES

定価4500円(本体4369円・税131円)

ISBN4-535-57834-6 C3036 P4500E

第10章

コミュニケーションの東西モデル

ジョセフ・ウォーヘル

ニューヨーク州立大学（オールバニ）コミュニケーション学科教授

1 課題の設定

この10年ほどの間に、西洋で作られて何らの修正も行うことなく、東洋に当てはめられてきたコミュニケーション理論に対する批判が、東洋側から湧きあがってきた。これら東洋側からの批判の大半は、西洋で構築され東洋的経験では疑問のあるカテゴリーを用いて、西洋的個人主義の視点から世界を説明している理論に対して行われている。

本論は、東西の思想家の双方に共通な原理から引き出された理論を述べるものである。偏りのある単一の世界観から始めるのではなく、この理論は、経験は種々の方法で説明できるという仮定に立ち、個人あるいは文化から抽出された象徴や概念を使用して、あらゆる個人的視点や文化的視点からの経験を正確に描くための方式を展開する。

この理論は、経験を多次元的な空間あるいは連続体として説明する。この空間の特定の領域や周辺が、概念あるいは「対象」を表す。どんな概念や対

象もその意味するところは、その空間にある他のすべての概念からの距離パターンによって決まる。そしてその概念のもつ意味の変化は、その連続体内の概念の動きによって示される。どの個人や文化も空間を同じ方法で定義することはない。したがってこの理論では空間の特定の領域や区域を定義するために、あらゆる文化に用いられる概念や対象を確認する方法を提供する。これを行う際に、各文化から生じる何組かの対象間の差異や「距離」の程度を、数量的に測定するのである。使用した測定方法は、リッカート尺度あるいはSD法等のようなカテゴリ的な「西洋的」測定方法ではなく、人間の経験量を計るのに洋の東西を問わず世界的に使用されているのと同じ比率測定法であるので、東洋あるいは西洋の使用者にも同じ妥当性をもつ。

最後にこの理論は、東西両方で同じように十分理解できる数学という共通の言語を使って、その主な前提や命題を述べる。これによって、特定の国の言語で書かれた理論のもつ偏りを排除するわけである。その結果、この理論は東西の研究者双方に、正確な測定システム、信頼度の高い数学的方法を提示すると共に、対等の関係を与えることになる。

2 東西の展望

ここ数年、東洋と西洋両文化体系にも適用する異文化間コミュニケーション理論の発達に関心が集まってきた。しかしながら、この2つの視点を統合するのは大変なことである。たとえば、西洋の研究者は東洋の考え方に見解の相違を見て一様に驚き、一方の東洋の研究者は西洋のさまざまな考え方に直面して同じような気持ちを抱くことがしばしばある。

しかし、この相違が東西の2つの展望の接触点に至ることもしはばある。本論は東西の文化両方にルーツを認められる異文化間コミュニケーションについて述べたものである。本論の目的は、文化と個人との間の信念と態度を説明することである。すなわちこれらの信念と態度が、個人と文化との間で行われるコミュニケーション過程によって、影響を与えたり受けたりする方式を説明することにある。

これまで西洋で発達し東洋で応用されてきた理論の中には、人々と文化と

の間の行動を決定する際の態度もあった。しかし東洋的コンテキストモデルには「西洋的」偏向がある。当理論は、両文化の展望が共ににおいて、両文化に適用しうるいくつかの研究方向から生まれてきた中国哲学の原理(1981)(本書展(特にデュルケムの伝統、あるいは西に関心のもたれる一貫性のある理論が東洋と西洋思想の十分な最少なくともこれが東洋と西洋間のものであることを希望している。

3 基本的前提

チェン(1981)とウォーヘルや、
ている原理の数や術語において、
ジョン理論とアメリカのコミュニ
致しているように見える基本的
異は、共通な1つの原理を彼ら
と言ってもよからう。チェンはこ
ち無限の解釈の原理、相対的相
けている。ウォーヘルとフィン
同じ一般的概念を提示している。
念である。

この原理はさまざまな表現で
ある。人間の経験は無数の方法で
れぞれが、ある展望からの有効性
なる原理を組み合わせることによ
に有効であることが、これによ

他のすべての概念からの距離、つまり意味の変化は、その連続体内文化も空間を同じ方法で定義する特定の領域や区域を定義する象を確認する方法を提供する。対象間の差異や「距離」の程度測定方法は、リッカート尺度ある測定方法ではなく、人間の経用されているのと同じ比率測定も同じ妥当性をもつ。十分理解できる数学という共通の。これによって、特定の国のである。その結果、この理論信頼度の高い数学的方法を提

の間の行動を決定する際の態度と信念が果たす役割について論じているものもあった。しかし東洋的コンテクストに当てはめようとするとき、これらのモデルには「西洋的」偏向があると双方の学者から批判されてきた。

当理論は、両文化の展望が共有する前提から生じたものであるという限りにおいて、両文化に適用しうるといふ見通しが立つ。この理論は、東西のいくつかの研究方向から生まれてきたものである。特に、チェンによって書かれた中国哲学の原理(1981)(本書第2章)や、物理学、数学および社会学の発展(特にデュルケムの伝統、あるいはミードや相互作用論派)等が結びついて、東西に関心のもたれる一貫性のある有用な理論モデルを生じたのである。この理論が東洋と西洋思想の十分な統合とみなされるにはかなり限界があるが、少なくともこれが東洋と西洋間のより一層の交流のための基盤を提供するものであることを希望している。

3 基本的前提

チェン(1981)とウォーヘルやフィング(1981)らの研究は、そこで用いられている原理の数や術語において異なっているものの、中国のコミュニケーション理論とアメリカのコミュニケーション理論双方にまたがる哲学的に一致しているように見える基本的な前提を提供してくれる。ここで見られる差異は、共通な1つの原理を彼らが相互に受け入れたうえでの結果にすぎないと言ってもよかろう。チェンはこの観念を3つの原理で述べている。すなわち無限の解釈の原理、相対的相対化の原理、そして絶対的相対化の原理に分けている。ウォーヘルとフィングは単一の原理——相対化原理——を用いて同じ一般的概念を提示している。これらはボーン(1965)により提唱された概念である。

この原理はさまざまな表現で述べられているが、中心概念は次のとおりである。人間の経験は無数の方法で解釈されること、さらにこれらの方法のそれぞれが、ある展望からの有効性をもつという概念である。基本的には、異なる原理を組み合わせることにより、人間経験の特性を新たな視点で見るのに有効であることが、これによって示されよう。

異なる文化間コミュニケーション
ながら、この2つの視点を統合
研究者は東洋の考え方に見解
は西洋のさまざまな考え方に
ばある。
点に至ることもしはしばある。
文化間コミュニケーションに
と個人との間の信念と態度を
態度が、個人と文化との間で
響を与えたり受けたりする方
理論の中には、人々と文化と

ウォーヘルとフィンク(1980)は、東西に共通なコミュニケーション理論が前提とする一連の原理を提唱している。これらの原理は、論理的、経験的に必要とされるのではなく、それらを採用する者にとってある有効性が生じるゆえに必要とされるのである。基本的には、本理論がこの目的にそってさまざまな方法で一連の原理を述べていることを認識したうえで、東西の伝統にとって共通する3つの一般的方向性に基づいていることに注目してみたい。まず第1に、相対主義での共通の基盤、すなわち経験はさまざまな方法で有効に述べられうるという信念である。第2に、東西の伝統の中で共通の文化的ルーツがあり、また広範に使用されている共通の測定ルールを採用である。第3に、両文化に共通な言語および両文化が同様に通じている数学を用いてこの理論の表明である。共有の認識論的原理、共通の測定ルール、共通の言語からこの理論は始まっているがゆえに、東洋と西洋双方にとって相互に接近し有効であるという希望がある。

4 初期的概念

対 象

この理論の中で最も初期的概念はその「対象」である。「対象」からだけでは、ある意識(個人的であれ文化的であろうと)が自覚される心理学的内容以上のものは出てこない(ウォーヘル、1972)。「対象」という言葉は、われわれが通常「物理的」対象と呼んでいるもの——たとえば、石、椅子、人など——を指す必要はない。「対象」とは、「……意図されるあるいは言及される物なんでも(ブルーナー、1966)」指すのである。相対化原理に従えば、あらゆる経験は解体され、無数の方法により構成された「対象」になるものであり、またいかなる方法も特定の経験の特性によって決定されえないのである。われわれは、異なる文化や各文化内の異なる個人は、異なる対象によってそれらの経験を示すということを予期し観察する。

信 念

相対化原理によれば、対象を限定化する過程はお互いに対象に関連づける

過程である。基本的には、こ
かかわっている。この理論で
間に抱く関係が、「信念」と呼

自己概念

人間経験の中で最も特殊な
ある。自己を対象として示す
を否定することではない。こ
要素として提示されることを
をあらゆる状況の中で意識す
する。

態 度

自己の定義、すなわち自分
概念的環境の中での対象との
他の対象とのこれらの諸関係
いて、自己についての信念は
意識している一連の態度であ

自己概念の定義化

特に西洋においては、諸対
ゴリー化の一過程とみなされ
いる。

「よく考えてみると、最も
事に対して知覚することあ
かかわっているということ
置づける」。たとえば、あ
つろいで」「ゆっくりと」「
葉は、われわれがその使い
ンプットされた刺激を、選

なコミュニケーション理論が
の原理は、論理的、経験的に
こってある有効性が生じる
理論がこの目的にそってさま
載したうえで、東西の伝統に
ることに注目してみたい。
う経験はさまざまな方法で有
東西の伝統の中で共通の文化
種の測定ルールを採用である。
義に通じている数学を用いて
共通の測定ルール、共通の
と西洋双方にとって相互に

である。「対象」からだけで
知覚される心理学的内容以上
という言葉は、われわれが通
り、石、椅子、人など——を
あるいは言及される物なん
「理に従えば、あらゆる経験
」になるのであり、またい
えないのである。われわれ
る対象によってそれらの経

お互いに対象を関連づける

過程である。基本的には、これは対象間の類似性や差異性に注目することと
かかっている。この理論では、ある個人あるいは文化があらゆる対象との
間に抱く関係が、「信念」と呼ばれる。

自己概念

人間経験の中で最も特殊な対象は、通常われわれが「自己」と呼ぶもので
ある。自己を対象として示すことは、自己を客体化するとかその過程的特性
を否定することではない。ここではむしろ、自己はあらゆる状況での一構成
要素として提示されることを単に意味しているだけである。人はつねに自己
をあらゆる状況の中で意識するし、それゆえ自己は一対象としての特性を呈
する。

態 度

自己の定義、すなわち自分自身とは何であるかを知る過程は、自己以外の
概念的環境の中での対象との関連を確立することとかかっている。自己と
他の対象とのこれらの諸関係は、自己についての信念を表す。この理論にお
いて、自己についての信念は「態度」と呼ばれる。自己は、それゆえ各人が
意識している一連の態度である(ミード、1934)と定義される。

自己概念の定義化

特に西洋においては、諸対象をお互いに関連づけるこの過程は、通常カテ
ゴリー化の一過程とみなされている。ブルーナー(1957)は次のように述べて
いる。

「よく考えてみると、最も明らかで第一義的な点は、ある対象やある出来
事に対して知覚することあるいは表示することは、カテゴリー化の行為と
かかっているということである。われわれは物事をカテゴリーの中に「位
置づける」。たとえば、あの人は「男」です／彼は「正直」です／彼は今「く
つろいで」「ゆっくりと」「歩いています」といった表現である。括弧の言
葉は、われわれがその使い方を知っているある種の手がかりを基としてイ
ンプットされた刺激を、選り分けたり位置づけたりすることを示してい

る。」

主としてカテゴリー化の意味するところは、個人は彼らが今まで直面したことのない対象に対処することができる——たとえば、そのような対象との関係に入る——ことを表す。そしてカテゴリー化の概念とは、ある階層の個々の構成子が、いくつかの共有した特徴あるいは一連の特徴を基準として包括されることを表す。それゆえに、あるカテゴリーに向かって方向づけが展開されれば、その方向は決定されたものとみなされるし、また個人あるいは文化は、このカテゴリーを構成している対象のいずれかの方向に進む。このような概念上の結びつきの重要性——それらが分離しており、その言葉が表すとおりの特徴をもつカテゴリーと適切に呼ばれうるかどうか——は強調してもしすぎることはない。なぜなら組織的な社会生活を可能にするのは、この過程であるからだ。もしカテゴリー化がなければ、ある対象との出会いは全般的に新しく固有のものとなる。つまりそれぞれの行為は、その行為を行う過程の中で自然に生じた二者間の関係のみならず、自己と対象との定義をもつ全般的な創造過程となるだろう。ブルーナー（1967）が指摘するように、ある程度までこのことは実際に起こる。確かにそれぞれの行為は部分的には固有であるが、それぞれの固有性を同じ文化内の同じ状況におけるすべての人間行為が類似している程度以上にとらえてはいけない。最も単純な社会的かわりあい——バスに乗るとか、本を購入するとか、靴をはく、授業に出る——は、そのかわりあいの基本的構造、その状況に直面する対象の社会的定義、その状況での要素間の相互作用等を予知していることを意味している。

人が新しい見知らぬ対象に直面したときでさえ、人は最もなじみのある構造特性——たとえば、その対象は青か黄か、大か小か、生きているか死んでいるかなどのような——の観点からその対象を解釈し確認するに違いない。どんな文化でも一個人があらゆる点でまったく未知の対象に出会う可能性は、非常にわずかなものである。そしてそのなじみのない状況においてでさえ、「見知らぬ何か」というカテゴリーは、それにもかかわらず、見知らぬ対象に対する個人の方向性や行為を含む各文化内の社会的に共有された意味あるカテゴリーなのだ。

すべてのカテゴリーは、必ずしも同様に普遍的なものとは限らない。最も

厳密な意味において、単一のカテゴリー化の一過程を意味する。個々の刺激は、その時に有機体一の対象として示されるから刺激をつねに受けている継続的によって連続体である刺激の関心が向けられるのである。が介入していることを端的に表も低位のカテゴリー化であろうれ自体順次、単一あるいは複数また順次「物理的」とか「存在り一化にいたるまで、より一般与のカテゴリーがもつこのカテ人が自己とその世界についてもなるであろう。

このような見解は注目に値す改善されうる余地がある。まず人間経験をカテゴリー的に捉えの混乱と不正確さに至らせてしている当事者たちが、彼ら自うである。それぞれの文化は、そして当事者同士が共通の経験いる際に、その差異はしばしばおこすのである。東洋人たち—ような連続体としての経験と。さまざまなカテゴリーにしてし

カテゴリーの観念は、数学的対象はある分類の一構成子としてうな正確な二面的機能は、人間が初期の作品の中で述べている

人は彼らが今まで直面した
 えば、そのような対象との
 概念とは、ある階層の個々
 連の特徴を基準として包括
 に向かって方向づけが展開
 るし、また個人あるいは文
 れかの方向に進む。このよ
 しており、その言葉が表す
 るかどうか——は強調して
 活を可能にするのは、この
 、ある対象との出会いは全
 の行為は、その行為を行う
 、自己と対象との定義をも
 367) が指摘するように、あ
 ぞれの行為は部分的には固
 じ状況におけるすべての人
 ない。最も単純な社会的か
 か、靴をはく、授業に出る
 況に直面する対象の社会的
 ていることを意味している。

人は最もなじみのある構
 小か、生きているか死んで
 災し確認するに違いない。
 印の対象に出会う可能性は、
 ない状況においてでさえ、
 かわらず、見知らぬ対象に
 的に共有された意味あるカ

なものとは限らない。最も

厳密な意味において、単一の対象を単一の対象として知覚することは、カテ
 ゴリー化の一過程を意味する。すなわち知覚の心理的メカニズムを構成する
 個々の刺激は、その時に有機体に作用する刺激全体と区別されて、思考の単
 一の対象として示されるからである。つまりそのカテゴリーは、環境からの
 刺激をつねに受けている継続的な過程を、別個のものとみなすのである。そ
 れによって連続体である刺激の任意の部分が取り出され。「1つの知覚」とし
 て関心が向けられるのである。この限られた事例は、対象と知覚の間に概念
 が介入していることを端的に表しているけれども、これはたぶん自己内の最
 も低位のカテゴリー化であろう。これら個々の「対象—カテゴリー」は、そ
 れ自体順次、単一あるいは複数の一般のカテゴリーになる。そしてそれらは、
 また順次「物理的」とか「存在的」とかのような最も一般的レベルのカテゴ
 リー化にいたるまで、より一般的なカテゴリーの構成子となるのである。所
 与のカテゴリーがもつこのカテゴリー階層での位置が高ければ高いほど、個
 人が自己とその世界についてもっている定義に関するその影響もより大き
 くなるであろう。

このような見解は注目に値するものであるが、綿密な吟味をすればかなり
 改善されうる余地がある。まず第1に、最も明らかな重要なことであるが、
 人間経験をカテゴリー的に捉える見方は、人間コミュニケーションをかなり
 の混乱と不正確さに至らせてしまう。特に1つのコミュニケーションを共有
 している当事者たちが、彼ら自身相対的に異なる文化的背景がある場合がそ
 うである。それぞれの文化は、異なる方法でその集合的经验をとらえている。
 そして当事者同士が共通の経験を表すのに、それぞれ異なるカテゴリーを用
 いる際に、その差異はしばしば異文化間のコミュニケーションの障害を引き
 おこすのである。東洋人たち——分類的・分離的構造を、スムーズに流れる
 ような連続体としての経験ととらえる——は、また経験を「細切れにして」
 さまざまなカテゴリーにしてしまうことを表面的と認知する傾向がある。

カテゴリーの概念は、数学的に言えば二面的機能を含んでいる。つまり、
 対象はある分類の一構成子として知覚されるか否かである。しかし、そのよ
 うな正確な二面的機能は、人間の知覚ではめったに起こらない。ブルーナー
 が初期の作品の中で述べているそのカテゴリーの例をみてみよう。たとえば、

もし「正直」の観念が本当にカテゴリー化されるなら、2人の人——両者ともある観察者により正直者としてカテゴリー化されている——は、彼らの正直さの見地からはお互いに認識できないであろう。しかしながら「正直さ」という階層の中でさえ、連続的範囲の変化が明らかに多くの文化の中で認識されるし、またそれは実際個人や文化の側からの行動の基礎を形成するのである。たとえば「歩くこと」はもちろん、「ゆっくりと」「意図的に」「くつろいで」など——といったように、かなりの階層内変化を認める。「人間」という言葉においてでさえ変化を認める。文化はしばしば個人が「人間」的な特徴を示す程度を区別している。しかしながら明らかにカテゴリー的であるものは、知覚の過程ではなくそれにより知覚が記述される言語——特に西洋の心理学者たちの言語——である。ウォーフ (1956) は、この過程を「lexation (語彙的なもの)」の1つとして定義している。すなわち

「……経験のさまざまな側面に対して単語 (名前) を与えること、そしてそれゆえに、それらの側面は虚構の分離状態の中で明確にされているにすぎない。たとえば、『板』とか『空』といった単語は、相対的に分離している個体に対してのみ有効である方法を用いるために、単なる視覚的幻影を思い起こさせる。『丘』とか『沼』のような単語は、われわれに両単語への態度の部分的相違あるいは地面の土壌成分を、『テーブル』とか『椅子』のようなものとはまったく異なるものとみなすよう促すのである。それぞれの言語は、異なる方法で継続的に広がりのある一連の流れの存在を、このように人為的に細切れにするのである。」

たとえば、個人が「黄色」として2つの小片を確認したとき、この分類は、色に関して見ただけでも、その2つを同じと知覚することを意味しているのではなく、同じ言語的カテゴリーを用いることによって、単に2片が類似したものであることを描写しているにすぎない。視覚的スペクトラムは、約4000から6400オングストローム単位の範囲をおおっている。そして調査によると、人間の眼はわずか数オングストロームの色の差を識別できるにすぎない。しかし通常の言語は、これらすべての差異に対して色彩的単語を提供できない。このように人々が話す通常の言語 (多くの場合に伝統的な西洋の社会科学者の言葉) は、色の知覚に対して本当におおよその描写だけを認めるのである。

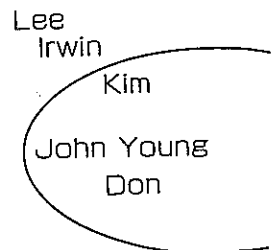
連続的カテゴリー体系

以上見てきたように、異一体系は、2つの重要な異なる文化経験を異なってカニケーションは混乱と誤り体系でも同じ広範なカテゴリー正確さを犠牲にしている。る「十分に類似した」それる。しかし人間の知覚の心も同一視できない。また明瞭とはみなされないしはみなされない。

図1は、一例を示す。

円以外の人々の誰も親しい」と考えられる。この無理がある。まず第1に、どこにその円が設定楕円かということできえは、図1で人々の名前が

図1 境界のあるカテゴリーとしての親しさ



なら、2人の人——両者と
られている——は、彼らの正
。しかしながら「正直さ」
かに多くの文化の中で認識
行動の基礎を形成するので
りと」「意図的に」「くつろ
変化を認める。「人間」とい
しば個人が「人間」的な特
かにカテゴリー的であるも
される言語——特に西洋の
は、この過程を「lexation
なわち

前)を与えること、そして
中で明確にされているにす
語は、相対的に分離してい
めに、単なる視覚的幻影を
は、われわれに両単語への
「テーブル」とか「椅子」の
う促すのである。それぞれ
一連の流れの存在を、この

確認したとき、この分類は、
することを意味しているの
よって、単に2片が類似し
的スペクトラムは、約4000
ある。そして調査によると、
識別できるにすぎない。し
も彩的単語を提供できない。
的な西洋の社会科学者の言
けを認めるのである。

連続的カテゴリー体系

以上見てきたように、異文化間コミュニケーション理論に対するカテゴリー体系は、2つの重要な問題点により特徴づけられている。まず第1に、異なる文化経験を異なってカテゴリー化しているがゆえに、異文化間のコミュニケーションは混乱と誤りに満ちている。そして第2に、どんなカテゴリー体系でも同じ広範なカテゴリーの中に著しく異なる経験を含むことにより、正確さを犠牲にしている。ここでのカテゴリーの観念は、同じだとみなされる「十分に類似した」それらの対象を、まとめようとする試みから始められる。しかし人間の知覚の心理的限界を認める場合でさえも、どの2つの対象も同一視できない。また相対化の原理に従えば、カテゴリーの境界は、鮮明で明瞭とはみなされないし、すべての観察者にとっても同様に同じであるとみなされない。

図1は、一例を示す。これは、伝統的西洋のカテゴリーの視点を表している。

円以外の人々の誰も親しくないともみなされる一方で、この円内の人々は「親しい」と考えられる。この型にはまった西洋的カテゴリーの見解は、かなりの無理がある。まず第1にそのカテゴリーの境界は、その円でそれらを表しているほど明確なものと考えられるべきではない。第2に、観察者が異なると、どこにその円が設定されるか、それはどの程度か、そしてそれは正円か楕円かということさえ一致しないのである。さらに第3に、異なる観察者は、図1で人々の名前がお互いにどこに置かれるべきかということでも一致し

図1 境界のあるカテゴリーとしての親しさ

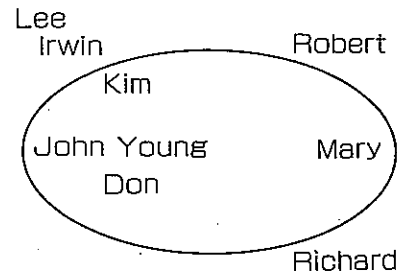
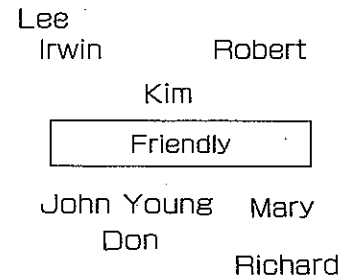


図2 連続的距離としての親しさ



ないであろう。

図2は、しかしながら、これらの問題を克服した別の方法を示している。

図2では、親しきは、全体の中では人々の名前と同じように、1つの対象として表されている。この場合、それぞれの人々の親密さの程度は、その人と「親しき」という言葉との間の距離によって与えられている。このように明確な境界はないのである。そして全体でのその「親しき」の対象からそれらがより遠くに位置するにつれ、知覚される親密さは減少するのである。

図2でさえもその全体図をいくぶん単純化している。なぜならあらゆる観察者・あらゆる文化も、どこに「親しき」の単語がこれらの人の中で置かれるべきかについて、またどこにそれぞれの人々の名前が他者と関連して置かれるべきかについて、実際お互いに不一致であるかもしれないからだ。しかしながらこれは、重要な問題とはならない。というのもわれわれは、それぞれの観察者あるいは文化に対して、複数の地図あるいは単一の地図を描くからである。カテゴリー的表示化と異なって、これらの地図は重ね合わせることができる。それゆえに、それぞれの名前あるいは対象は、一群・一集団の点により表される。さまざまな観察者間での意見の相違は、それゆえに彼ら自身の地図における対象物設定の際の差異に帰せられる。ちょうど異なる文化の見解の相違が、その構成員すべてに対する相違の平均的位置での差によって説明されるように。

周 辺

どんな対象も、異なる文化、各文化内の異なる個人あるいは異なる時間における同じ個人によってでさえ、それぞれの確な位置に置かれる。それゆえにそれは意味の基礎として、より近似的でたぶんより現実的観念を示しているとするのが適切である。われわれはここで「周辺」という言葉を選んだ。この言葉によってあらゆる所与の概念あるいは対象が、「通常」その中に位置づけられる全体的範囲内での一般化された地域あるいは局所を意味するのである。あらゆる対象は、その範囲内の他のすべての対象との全体的関係によって明確にされる一方で、その対象の意味は、接近する周辺との距離関係によって十分な近似的結果をえる。一般に人がある個人あるいはある集団に、

ある概念を定義づける、
られる意味におおまかに
論の論理に従えば、こ
ているその対象と相対
の概念の「周辺」を定
されている。物理的地
文化空間の地域あるい
して全東半球を意図し
はまたわれわれは、日
別な部屋でさえも小区
単一の対象として文化
ができるし、またそれ
別することもできる。
を見事に検証しさえす
般的レベルのどれも「
ありうるし、またそれ
かである。

5 測 定

数え方

この理論の中では、
の周辺に位置している
文化から抽出されたあ
概念を定義するよう求
ブル集団によって用い
言語測定プログラムのよ
等、1980)。

周辺を定義づける主要
純である。この理論に

を別の方法を示している。
 と同じように、1つの対象の親密さの程度は、その人えられている。このように「親しさ」の対象からそれは減少するのである。
 いる。なぜならあらゆる観がこれらの人の中で置かれ名前が他者と関連して置かれるかもしれないからだ。しかうのもわれわれは、それぞろいは単一の地図を描くからの地図は重ね合わすこと対象は、一群・一集団の点目違は、それゆえに彼ら自しる。ちょうど異なる文化の平均的位置での差によ

ある概念を定義づけるように求める場合、彼らはその概念に対して定義づけられる意味におおまかに類似している同義語や単語を引用して答える。当理論の論理に従えば、これら他の対象あるいは概念は、全範囲内で問題となっているその対象と相対的に「接近して」位置するだろう。この小区域は、その概念の「周辺」を定義する。序列化の観念は、このモデルによってよく表されている。物理的地域あるいは領域が、大小の尺度で考察されるように、文化空間の地域あるいは周辺もまたそうである。われわれは一度に一対象として全東半球を意図して「東洋」のような簡単な言葉でそれを示す。あるいはまたわれわれは、日本、中国、東京のようなまたはごく近所や家の中の特別な部屋でさえも小区域を区別しているかもしれない。同様にわれわれは、単一の対象として文化的空間の大きな区域を「感情」のように規定することができるし、またそれと「愛」、「憎しみ」等のような特別に小さな周辺と区別することもできる。あるいはわれわれは、「愛」のような特別な周辺の構造を見事に検証しさえするかもしれない。相対化の原理に従えば、これらの一般的レベルのどれも「正しい」レベルにないが、さまざまな異なるレベルもありうるし、またそれぞれは根拠あるタイプの経験を示していることも明らかである。

5 測定

数え方

この理論の中では、あらゆる概念の意味を定義づけるための第一歩は、その周辺に位置している他の概念を定義することである。これは通常、当該の文化から抽出されたあるサンプル集団に、やや未体系的な面接法により特定の概念を定義するよう求める際に行われる。これらの定義を構築する際にサンプル集団によって用いられた単語や言葉は、それゆえに(通常ガリレオ式(tm)言語測定プログラムのような)計数プログラムによって数えられる(ウォーヘル等、1980)。

周辺を定義づける主要な対象や概念を決定化するものは、時には比較的単純である。この理論によると、たとえば一連の人間感情は、文化空間内の1

人あるいは異なる時間に
 置に置かれる。それゆえ
 り現実的観念を示してい
 !」という言葉を選んだ。
 が、「通常」その中に位置
 いは局所を意味するので
 対象との全体的関係によ
 する周辺との距離関係に
 人あるいはある集団に、

つの周辺を構成している。1977年に、アジア、オーストラリア、太平洋諸国からと少数のアメリカ人からなるイーストウェストセンターの22人の回答者たちは、それぞれ主要な人間感情であると信じられているものを一覧表にすることを求められた。1981年の春には、ニューヨーク大都市地区のオールバニでランダム調査法による50人の電話による回答者が、同様のものをリスト化するように求められた。そして最も多く述べられた10の感情は、イーストウェストセンターのサンプルより抽出された同様の11の感情のうち10と一致したのである。

実際にはそれ以上の明示しうる感情があるけれども、ここで挙げられた10の代表的感情は、感情の周辺を調べる際に基本的「目印」として役に立つ。

クラスター化

時には核となる組み合わせの目印の対象を決定することはかなりむずかしい。これは一連の密接な同義語あるいは同義句が、回答者によって同種の対象を表すのに用いられるときに比較的起こりやすい。この場合に、単にある単語が述べられた出現回数を数えることは、誤りになるだろう。というのも、その「同じ」考えは、複数の単語あるいは句によって示されるからである。この場合に、異なる単語の類似性に関する情報が、それぞれの単語が出てくる単純な頻度に付け加えなければならない。

典型的には、2つの次のような手順が用いられる。まず第1は、同じ面接の中で同じ回答者達が表現に用いた言葉は、それらの面接の中でそれらの言葉が同程度に出現するそれらの頻度とおおよそ比例しているようにみえるという仮説である。コンピューター・プログラム(ジョンソン)は、それぞれの面接(あるいはそのプログラムが面接を引き合いに出すような「場面」)内でのそれぞれの言葉の頻度数を計算し、そして言葉×言葉の共変行列を提示するために、転置法によってこれらの言葉とエピソード行列を相乗する。そして、それはジョンソンの階層的群化(クラスター)プログラム(1967)のような直径法のクラスター・プログラムにインプットされる。

1981年春に、オールバニのニューヨーク州立大学の51人の学生は、日常生活の中で最も重要なものの10をリスト化することを求められた。その単語計数

プログラムは、103の固有以上述べられた。これらのプログラムに入れられ、そして。単語のリストや出現基礎となるクラスターは、

これらのクラスターは、視点から主要な「目印」とされる主な目印となる概念。いは句が類似している程度。ということ想定すること。ーヨーク等のTVの内容。割の概念の出現間の平均。ンが既に述べたような階。るいはガリレオ式(tm)。

目印の調査

人が十分な計算やクラ。作業の計算かどうか、あ。主要な概念が定義される。ことである。

これらの概念は、周辺のとは必ずしも考えられて。れについて同意している。地の物理的地域を測定する物である。この理論による定されることが認められ。概念に精通しており、周。ろうということを予期する概念が抽出されることを。んそれらが確認されると、

ストラリア、太平洋諸国
センターの22人の回答者
ているものを一覧表にす
ク大都市地区のオールバ
が、同様のものをリスト
と10の感情は、イースト
1の感情のうち10と一致

ら、ここで挙げられた10
目印」として役に立つ。

ることはかなりむずかし
回答者によって同種の対
この場合に、単にある
なるだろう。というのも、
て示されるからである。
それぞれの単語が出てく

まず第1は、同じ面接
り面接の中でそれらの言
っているようにみえたと
ンソン)は、それぞれの
ような「場面」内でのそ
り共変行列を提示するた
りを相乗する。そして、
ラム(1967)のような直径

751人の学生は、日常生
うられた。その単語計数

プログラムは、103の固有な単語と句を確認した。そしてその内40個は、2回
以上述べられた。これらのデータは、ジョンソンのコンピューター・プログ
ラムに入れられ、そしてそれはいくつかの基本となるクラスターを表してい
る。単語のリストや出現頻度数は、表1に表されている。これらの単語の基
礎となるクラスターは、表2に表されている。

これらのクラスターは、周辺がこれらの回答により位置どりされるという
視点から主要な「目印となる」対象であると捉えられる。周辺が位置どりさ
れる主な目印となる概念を引き出す別の手続きは、あらゆる2つの単語ある
いは句が類似している程度は、それらの発生間の時間の長さに比例している
ということ想定することである。東京、マニラ、シカゴ、ロンドン、ニュ
ーヨーク等のTVの内容分析では、ゴールデンアワーのTV番組の156の性役
割の概念の出現間の平均時間を測定した。これら平均間隔行列は、ジョン
ソンが既に述べたような階層的群化プログラムへの見出し語に適している。あ
るいはガリレオ式(tm)多次元尺度プログラムに直接的に適用できる。

目印の調査

人が十分な計算やクラスターを使うかどうか、あるいは計算だけか単に手
作業の計算かどうか、あるいは述べられた手順の客観性を使えるか否かは、
主要な概念が定義される概念の周辺に位置している「目印」を明らかにする
ことである。

これらの概念は、周辺の中のすべての意味ある概念を網羅的に述べている
とは必ずしも考えられていない。むしろそのサンプルの多くの構成員が、そ
れについて同意している主要な概念として考えるべきであろう。それらは陸
地の物理的地域を測定する以前に、調査者が地面に打ち込んだクイと同類の
物である。この理論によると、いくつかの環境の中では目印が非帰納的に決
定されることが認められる(ウォーヘル等、1980)。しかし回答者がそのような
概念に精通しており、周辺内でそれらと関連のある意味を一般的に考えるだ
ろうということを予期するために、対象となるサンプル集団からそのような
概念が抽出されることを一般に期待する傾向がある。しかしながら、いった
んそれらが確認されると、次の段階は、お互いに関連のあるそれらの正確な

1	19	愛	78	2	神	64	1	宗教
8	14	食物	80	2	自然	65	1	科学
21	11	水	87	2	人間	66	1	選坑
50	10	家族	2	1	脱出	68	1	辞典
30	9	金	3	1	力	69	1	正面
22	8	健康	9	1	服	70	1	空間
5	7	自己	11	1	意識	71	1	時間
24	7	知識	13	1	存在	72	1	動機
27	7	人々	14	1	死	74	1	考慮
33	7	コミュニケーション	16	1	善良	75	1	親切
20	6	空気	17	1	能率	79	1	平和
23	5	避難所	18	1	マズローの階層	81	1	目標
67	5	幸福	19	1	スキー	82	1	睡眠
73	5	友人たち	25	1	利己主義	83	1	女性
7	4	太陽	26	1	協力	84	1	満足
31	4	音楽	29	1	飲み物	85	1	経験
42	4	仲間	35	1	成功	86	1	冒険
56	4	人間的	36	1	原子	88	1	芸術
10	3	電話	37	1	地球	89	1	春
15	3	セックス	39	1	受胎コントロール	90	1	新聞
28	3	感情	40	1	木	91	1	コンピューター
32	3	生活	43	1	知能	92	1	チーズケーキ
34	3	教育	46	1	憎しみ	93	1	木曜の夜
41	3	所信	47	1	同情	94	1	わが家
52	3	思考	48	1	核兵器	95	1	楽しみ
53	3	感覚	49	1	傷	96	1	構造
58	3	安全	51	1	猫	97	1	本性
4	2	文学	54	1	相違	98	1	情緒
6	2	他人	55	1	言語	99	1	親戚関係
12	2	宇宙	57	1	精神的安定	100	1	尊敬
38	2	火	59	1	調和	101	1	気遣い
44	2	自動車	60	1	細胞	102	1	植物の生命
45	2	仕事	61	1	友人	103	1	動物
76	2	信頼	62	1	輪			
77	2	夢	63	1	脳			

[illegible]

DIAMETER METHOD

6 500 000 000 000
5 500 000 000 000
5 500 000 000 000
2 500 000 000 000
1 500 000 000 000
500 000 000 000

4C00JCU0 • CU1
5C00JCU0 • CU1

ター分析が表2に示されている。

64	1	宗教
65	1	科学
66	1	選択
68	1	辞典
69	1	正面
70	1	空間
71	1	時間
72	1	動機
74	1	考慮
75	1	親切
79	1	平和
81	1	目標
82	1	睡眠
83	1	女性
84	1	満足
85	1	経験
86	1	冒険
88	1	芸術
89	1	春
90	1	新聞
91	1	コンピューター
92	1	チーズケーキ
93	1	木曜の夜
94	1	わが家
95	1	楽しみ
96	1	構造
97	1	本性
98	1	情緒
99	1	親戚関係
100	1	尊敬
101	1	気遣い
102	1	植物の生命
103	1	動物

意味を決定することである。

目印的概念の意味の測定

既に述べてきたように、あらゆる概念あるいは「対象」の意味は、すべて他の概念との類似性と差異のパターンにより与えられる。同様にある特別な周辺概念の意味は、周辺内の他の主要な概念との類似や非類似のパターンにより与えられている。このようにしてたとえば、感情の領域にはいる「愛」のような単一の感情は、他の感情と関連のある類似性や差異により定義づけられる。

対象間の相違点は、次のような連続数字システムにより表される。つまり十分に同一視できると考えられる2つの対象は、ゼロを基準とした相違点あるいは差の得点が割り当てられる。そして差の増加した何組かの対象は、増加した値の数により表されるのである。それゆえ、いかなる対象も相違の大きさを表すベクトル $1 \times K$ 、あるいは $S(i, j)$ が概念 i と j 間の意味差の大きさを表す距離 $S(i, j)$ として定義づけられる。もし j が1から k にまで変化するのが認められるなら、そして k がある文化によって同一視できる対象や概念の総数であるとき、このベクトルは所与の時間 t において、その対象の十分に正確な定義を表している。もし k が、特定の周辺での「目印」となる概念あるいは対象のみを表すなら、 $S(i, j)$ $j=1, k$ は、その周辺のその概念の正確な定義を表す。同様に2番目のベクトル $S(p, j)$ 、 $j=1, k$ は、他の概念 k と関連のある p 概念の定義を表す。最後に、 i と j 両方は1から k まで変わることが認められる。その結果、すべての k 概念が互いに関連して正確に定義づけられる行列となる。この理論では、それゆえに行列 $S(i, j)$ 、 $i=1, k$ 、 $j=1, k$ は時間 t の一地点の概念 k の意味を表している。

このような意味定義づけの方法の主な利点は、カテゴリー的構成以上に正確さを増すことである。カテゴリー体系では、2つの概念や対象が比較するときに、それらは同じカテゴリーの構成子としてみなされるのに十分類似しているか否か判断される。しかしながら最新の方法（意味定義づけの方法）を用いれば、2つの対象が類似している程度は正確に表しうるのである。

実際問題として、何組か物理的距離が測定される方法可能である。対象となる母の1つの「基準組」として準距離に対する周辺内のする。一般に、多くの調査者“もしAとBがU単位分離か？”

この尺度的方法は、2つが限定されていない形態ゆい方法以上には有効な情報あるいは7つのカテゴリー数れは数百万の人々により「に、その手続きは通常東西は、既に多くの文化にとっションがより正確に行われ、西洋といった文化があるの。この方法は、公には物理科学者と物理科学者の間の利用することにより増すので、範に討論されてきている。洋のコミュニケーション研究1981、ニュートン等、1981)。

文 化

社会科学における文化のその言葉は、所与の集団の事物、服装スタイル、生き方、く用いられている。このよう識的側面に対していくぶん制

実際問題として、何組かの対象間の距離を数学的に表することは、通常物理的距離が測定される方法と形式面で同一である評価尺度の手続きによって可能である。対象となる母集団から抽出された回答者のサンプルは、概念内の1つの「基準組」として表され、基準距離との比率を示すために、この基準距離に対する周辺内のすべての組の対象間の差異を比較するよう求められる。一般に、多くの調査者はその型の方式（英語による）を採用している。

“もしAとBがU単位分離れているなら、XとYはどの程度分離れているのか？”

この尺度的方法は、2つの利点を提供してくれる。まず第1に、その方法が限定されていない形態ゆえに、それは西洋的尺度法として一般に知られている方法以上には有効な情報を生じる。そしてそれは限定された（通常2、5あるいは7つのカテゴリー数の）尺度で記録された情報を確認する。第2に、これは数百万の人々により「物理的」概念として日常的になじみがあるがゆえに、その手続きは通常東西の両文化で知られている。この方法の論理や方式は、既に多くの文化にとってもなじみがあるゆえに、異文化間コミュニケーションがより正確に行われる。これらの文化間には、単にアジア、太平洋、西洋といった文化があるのみならず、特に科学の文化といったものもある。この方法は、公には物理科学の主要な測定方法と同じであるがゆえに、社会科学者と物理科学者の間の相互コミュニケーションの機会、この方法を採用することにより増すのである。この尺度法の使用上の特徴は、至る所で広範に討論されてきている。そしてまたそれらは、すでにアジア、太平洋、西洋のコミュニケーション研究者により広範に用いられている（キンケード等、1981、ニュートン等、1981）。

文 化

社会科学における文化の意味は豊富にあるけれど不明瞭である。しばしばその言葉は、所与の集団の実際的な側面——彼らの社会、価値、態度、人工物、服装スタイル、生き方、付き合い方などを含む——を言及するのに幅広く用いられている。このような理論においては文化という言葉は、社会の認識的側面に対していくぶん制限的に用いられている。本論で用いられている

「対象」の意味は、すべてられる。同様にある特別な類似や非類似のパターン、感情の領域にはいる「愛」似性や差異により定義づけ

ムにより表される。つまりゼロを基準とした相違点あ加した何組かの対象は、増いかなる対象も相違の大きが概念*i*と*j*間の意味差のる。もし*j*が1から*k*にま文化によって同一視できる与の時間*t*において、その

特定の周辺での「目印」
 $j) j=1, k$ は、その周辺ベクトル $S(P, j)$ 、 $j=$ を表す。最後に、 i と*j*両結果、すべての*k*概念がおこの理論では、それゆえこの一地点の概念*k*の意味

カテゴリー的構成以上に正つの概念や対象が比較しうまなされるのに十分類似し去（意味定義づけの方法）をこ表しうるのである。

理論では、文化はあらゆる社会の全認知構造に関係している。ゆえにさまざまな文化的変化は、ある時間にわたるこれらの構造の変化と考えられる。

しかしながら、もしあらゆる文化の信念、態度を綿密に調べれば、文化の個々の構成員の間にはかなりの変化形をつねに示すことになる。それにもかかわらず、もし文化の概念がある重要性をもつことになるならば、個々の信念は多少凝集的に群がるある中心性をもつ意見となるに違いない。これは文化にとって中心的意見の核であるのみならず、明らかにそれに接している人々にある強制力をもつと考えられる。たとえば、中心的信念から逸脱することは、結果的に文化的規範に対して逸脱した信念を再調整するよう逸脱者に強い力となるのである。

これらの力は、ある文化的作用側（これは時に事実であるが）の顕著な意図を含むことを意味しているのではなく、むしろここではデュルケム（1951）が次に示唆しているように、あらゆる人あるいは集団の意図とは独立した自然発生的なものと考えられている。すなわち

「他方すべての内面的生活は、その外側から基本的構成要素を描いている。われわれは、純粋に土台を崩された状態でわれわれ自身の意識を反映することはできない。つまりこの状態は創造しがたい。意識はそれ自身というより、何か他のものによって影響される時にのみ引き起こされるようになる。」

より単純な表現で言えば、これは、人がそれについて考える何かなしには考えることはできないということを表している。文化は、個人的思考を強いる。なぜならそれは思考が生じる基となる情報体を提供するからである。もしある文化の2人の構成員が、本質的に同一の情報源から同一な基本的情報体を受け取るならば、そこから生じるどんな異常なメカニズムも、また彼らがなぜ同じように思考したり行動するのもあえて説明する必要はないくらいに容易に推察できよう。ある文化の個々の構成員は、それぞれ異なって思考したり行動する一方で、所与の文化を代表する「平均的」思考や行動も存在する。その「平均的」文化は、平均的行列 S により正確に代表される。そしてそこでは、あらゆる見出し語 $S(i, j)$ が、ある文化のすべての構成員により理解されている対象 i と j 間の距離あるいは相違点である数学的平均

的概念である。1951年にデュル

「時や場所により変化する」
高い結婚率、より多くの自殺
る。これらの流れは明らかに
彼らが個々の場合にとる形
たちに孤立しているそれら
率、結婚率や自殺率、すな
その中でそれらが生じる範
れる数によってかなりの正
平均は、一定の状態の集団

「文化」として文化的対象
概念のすべてを表しているこ
の信念や行為がもつ傾向に対
ある。もちろんその平均値は
すべての価値の平均値からの
である。この意味において

6 文化変容

文化に対する中心化傾向
ルにとって意味がある。その
化 A と B が個々の構成員の
されているとみなされる。
念の総数 N_0 で割った個々の
均は N_0 のような信念の総数
のである。これらの2つの
れの文化的平均値は、新し
この理論から予測される。

$AB =$

with N

的概念である。1951年にデュルケムが注目しているように、

「時や場所により変化する強度をもつ意見の流れが、たとえばある集団に高い結婚率、より多くの自殺率、高率あるいは低率の出生率等を促している。これらの流れは明らかに社会的事実なのである。一見するとそれらは、彼らが個々の場合にとる形態と不可分のように見える。しかし統計は、私たちに孤立しているそれらの平均値を与えてくれる。事実それらは、出生率、結婚率や自殺率、すなわちその出産、結婚、自殺の年間平均総数を、その中でそれらが生じる範囲内にある年齢別の人数で割ることにより得られる数によってかなりの正確さをもって表すことができる。それゆえその平均は、一定の状態の集団心を表している。」

「文化」として文化的対象間の距離を表す平均的行列を示すことは、その概念のすべてを表していることを意味しているのではなく、むしろその文化の信念や行為がもつ傾向に対して「均衡的位置」を確認しようとするものである。もちろんその平均値は、数学的中心化傾向を表している。というのもすべての価値の平均値からの個々の価値の偏差は、合計すると0になるからである。この意味においてすべての分布の平均値は均衡点である。

6 文化変容

文化に対する中心化傾向としての平均値の観念は、文化変容の数学的モデルにとって意味がある。その最も初歩の形態において、この理論は2つの文化AとBが個々の構成員の信念（上で定義したように）の平均としてモデル化されているとみなされる。そして、それゆえにAの平均値は、そのような信念の総数 N_a で割った個々の信念 $a(i)$ の総数に等しい。そしてまたBの平均は N_b のような信念の総数により割られた個々の信念 $b(i)$ の数に等しいのである。これらの2つの文化がお互いにコミュニケーションするとき、それぞれの文化的平均値は、新しい共通の均衡的平均値 AB に向かって転換するとこの理論から予測される。

$$AB = (N_a * A + N_b * B) / (N_a + N_b)$$

$$\text{with } N_{ab} = N_a + N_b$$

関係している。ゆえにさまざまな製造の変化と考えられる。

これを綿密に調べれば、文化のことになる。それにもかかわることになるならば、個々の信念に違いない。これは文化にそれに接している人々の心的信念から逸脱すること、再調整するよう逸脱者に強

（事実であるが）の顕著な意図ここではデュルケム（1951）が団の意図とは独立した自然

基本的構成要素を描いていわれわれ自身の意識を反映がたい。意識はそれ自身とにのみ引き起こされるよう

について考える何かなしには文化は、個人的思考を強いを提供するからである。も衆源から同一な基本的情報なメカニズムも、また彼らで説明する必要はないくらいは、それぞれ異なって思「平均的」思考や行動も存り正確に代表される。その文化のすべての構成員は相違点である数学的平均

ウォーヘルとハラー (1970)、サルテールとウォーヘル (1974)、そしてデーンズ、ハンターとウォーヘルは、この理論がかなりの許容度をもって実験や調査データに適し、また考えられる他の理論よりも優位性があることを報告している。

7 文化のメカニズム：文化Pの数学的モデル

既述したように、この理論により示されるさまざまな文化間の重要な接点とは、基本的概念としてのその距離の使用にある。数年にわたって、この概念の他の利用者たち——ことに物理学者ら——は、特に有益である“距離—型”情報のある種の数学的方式を見出している。これらで中心となるものは、主軸に対するその変換である。平均距離行列の尺度積の主軸は、その上に対象や概念のそれぞれが表されるデカルト平行座標系を構成している。この尺度の中には、すべての固有な測定法が保持されている。それゆえに、この空間のあらゆる2つの概念間の距離は、それが平均距離行列S (ウォーヘルとフリンク、1980) の中にある場合と同じようなものである。

図3は、大都市地区オールバニで抽出された最も重要な感情周辺の平面図を表している。それは、平均距離行列で見出された感情間の関係をおおまかに視覚化している。

この方法でデータを再整理することは、2つの主要な利点がある。まず第1にそれは、多くの重要な計算を単純化している。その固有ベクトルのそれぞれに関する機能は、他のあらゆる固有ベクトルに関する機能から独立しているからである。第2に、デカルト平行座標系での動点としての文化過程の描写は、本質的に物理、工学における共通したやり方と一致しているのである。それゆえに、これらの分野の研究者間で達成され理解されたやり方が、文化過程研究の中の人間コミュニケーション研究者にとっても容易に行うことができるのである。研究者の中には (キンケード、1980、ウォーヘル、1980、バーネット、1980、コディ、1980)、この理論により展開された方式が、物理的過程から文化的過程の研究に至るまで十分適していることを示している者もいる。この理論についての詳細を十分に説明することは、この論文の対象外

であるけれども、その内のいくつは異文化間研究者にとって特に引くものとなるだろう。

学 習

知識は異なる対象間での弁別意味しているがゆえに、増大した弁別能力は、この論文ではお互いに対象する増大した能力により表される一方で、忘却はこれらの弁別を助ける。この理論においては忘却は周囲の全範囲の中での増加とする。ある空間の全範囲は、モデル

観 点

この理論の出発点となる前提とということである。このモデルのは、あらゆる周辺内あるいは全空間。「他者の態度を取ることは、しているがゆえに、そのような変化の階層により表される。単に個人表面的差異を転換する能力は、異なる側面の1つである。

文化変容

ある文化の状態は、つねにそのより与えられているがゆえに、文法によりモデル化される。これは、有効範囲内での物理的空間を。文化変容の研究に対して自然

ーヘル(1974)、そしてデー
の許容度をもって実験や
も優位性があることを報告

モデル

異なる文化間の重要な接点
数年にわたって、この概
特に有益である“距離—
これらで中心となるものは、
累積の主軸は、その上に対
を構成している。この尺
いる。それゆえに、この空
距離行列S(ウォーヘルとフ
ある。

重要な感情周辺の平面図
感情間の関係をおおまか

重要な利点がある。まず第
その固有ベクトルのそれ
関する機能から独立して
動点としての文化過程の
方と一致しているのであ
れ理解されたやり方が、
にとっても容易に行うこ
、1980、ウォーヘル、1980、
開された方式が、物理的
ることを示している者も
とは、この論文の対象外

であるけれども、その内のいくつかの考
えは異文化間研究者にとって特に興味を
引くものとなる。

学 習

知識は異なる対象間での弁別能力を意
味しているがゆえに、増大した知識(学
習)は、この論文ではお互いに対象を弁別
する増大した能力により表される。また

一方で、忘却はこれらの弁別をぼかしてしまうことを示している。そのよう
な弁別は、この理論においては距離で表されるがゆえに、学習は空間あるい
は周辺の全範囲の中での増加として表される。また忘却は減少として表され
る。ある空間の全範囲は、モデル内で容易に計算される。

観 点

この理論の出発点となる前提とは、経験は観察者の観点に従って変化する
ということである。このモデルの中では、異なる観察者あるいは文化の観点
は、あらゆる周辺内あるいは全空間内での個々の自己点の位置により表され
る。「他者の態度を取る」とは、他者の観点からの経験を見ることを必要と
しているがゆえに、そのような変化は、この理論の中では、つねに循環や変換
の階層により表される。単に個人あるいは文化的観点の相違による知覚上の
表面的差異を転換する能力は、異文化間研究にとってこの理論の最も魅力的
な側面の1つである。

文化変容

ある文化の状態は、つねにその空間内の文化的対象の相対的位置(関係)に
より与えられているがゆえに、文化変容はその空間を通してのその対象の動
きによりモデル化される。これまでの研究によると、この文化空間での動き
は、有効範囲内での物理的空間を通る物理的動作の法則の一般化に適してい
る。文化変容の研究に対して自然の「物理的」法則を応用できることは、こ

図3 最も重要な感情周辺の
平面図

怒り	愛
嫉妬	
悲しみ	幸せ
恐れ	自己保存
憎しみ	喜び

の理論の魅力的な面である。

異文化間コミュニケーション

上述してきたように、2つのコミュニケーション体系は、均衡点としての両体系の平均点に収斂する傾向があるとするこの理論により予測され、そして空間行列の中では、この過程は衰退的調和振動子の微分的均衡点の一般化によりモデル化されている。これらの均衡点は、移住に伴う移民グループの文化的信念内の観察された変化に、許容誤差内で適合することが示された(キンケードらを見よ、1981)。

説 得

文化空間の未来の形態を予測する能力と結びつくことによって、所与のある出来事は文化変容を前もって予測できる能力となる。説得的メッセージを発展させるための正確な数学的手法が、東西両方のコンテクストによってこの理論の中で用いられている(チン、1980、ウォーヘル、1980、コディ、1980)。これらの方法は、家族計画キャンペーン、栄養キャンペーン等の大規模な変化達成目標で特に有効であろう。

8 結論と意味

この理論的文脈内触れてきた内容以上のことを述べることは、この論文だけでは困難である。より吟味された説明が、初歩レベルでウォーヘル等(1980)に、また高度のレベルではウォーヘルとフィンク等(1980)に見出せる。この理論の最終的運命を決定するにはあまりに性急すぎるであろうが、これに関する初期の多くの研究結果は、おおむね良好であった。これらの最終的結果がどうあれ、東西でこの理論を研究している研究者たちにより提示されたコミュニケーションや相互理解における高まりは、今後大変価値のあるものとなる。

ケーション部門の協力を得た。
それにコミュニケーション理論
ーション理論についてのセミナ
びサラ・キングやハワイ大学コ
あたることができたことに謝辞

参考文献

Barnett, G. and D. L. Kincaid, paper presented at the annual meeting of the Association, May, 1980.

Blumer, H., "Commentary" 71(5) 535-547.

Bruner, J., "Social Psychology and E. Hartley, *Readings in*

Born, M., *Einstein's Theory*

Cheng, Chung Ying, "Chinese presented at the EWCI Conference on Western Perspectives, Honolulu

Cody, M., "The validity of multidimensional configurations" *New Brunswick, N.J.*, 1980.

Danes, J., J. Hunter and J. Kincaid, "The validity of information", *Human Communication* Durkheim, E., *Suicide*, Gluckman, S. C., "Hierarchy of power", 1967.

Kincaid, D. L., J. O. Yum, of Korean immigrants in Hawaii paper presented at the annual meeting of the Association, Minneapolis, 1980.

Mead, G.H., *Mind, Self and Society* Chicago Press, 1934.

Newton, B., Saltiel, J., article on accumulated information 1975, pp.333-344.

Whorf, B.L., in J. B. Carroll

ケーション部門の協力を得た。ローレンス・キンケード博士、Chung Ying Cheng、それにコミュニケーション理論の過程とコンテキスト研究班が行っているコミュニケーション理論についてのゼミナールのメンバー、コミュニケーション学科の学生およびサラ・キングやハワイ大学コミュニケーション学科のご好意により、本稿の準備にあたることができたことに謝辞を述べたい。

参考文献

Barnett, G. and D. L. Kincaid, "A mathematical theory of cultural change", paper presented at the annual meetings of the International Communication Association, May, 1980.

Blumer, H., "Commentary and Debate", *American Journal of Sociology*, 1966, 71(5) 535-547.

Bruner, J., "Social Psychology and Perception", in E. Maccoby, T. Newcomb and E. Hartley, *Readings in social psychology*, New York, Holt, 1958.

Born, M., *Einstein's Theory on Relativity*, N. Y., Dover, 1965.

Cheng, Chung Ying, "Chinese Philosophy and Communication Theory", Paper presented at the EWCI Conference on Communication Theory from Eastern and Western Perspectives, Honolulu, 1981.

Cody, M., "The validity of experimentally induced motions of public figures in multidimensional configurations", *Communication Yearbook, Transaction Books*, New Brunswick, N.J., 1980.

Danes, J., J. Hunter and J. Woelfel, "Belief change as a function of accumulated information", *Human Communication Research*, Spring, 1978.

Durkheim, E., *Suicide*, Glencoe, Illinois, The Free Press, 1951.

Johnson, S. C., "Hierarchical Clustering Schemes", *Psychometrika*, 32,3, September, 1967.

Kincaid, D. L., J. O. Yum, J. Woelfel and G. Barnett, "The cultural convergence of Korean immigrants in Hawaii: an empirical test of a mathematical theory", paper presented at the annual meetings of the International Communication Association, Minneapolis, 1981.

Mead, G.H., *Mind, Self and Society*, C. Morris, ed., Chicago, University of Chicago Press, 1934.

Newton, B., Saltiel, J., and J. Woelfel, "Inertia in cognitive processes: the role of accumulated information in attitude changes", *Communication Research*, 1, 1975, pp.333-344.

Whorf, B.L., in J. B. Carroll (ed.), *Language, Thought and Reality: selected*

ョン体系は、均衡点としての
の理論により予測され、そし
動子の微分的均衡点の一般化
、移住に伴う移民グループの
で適合することが示された(キ

つくことによって、所与のあ
となる。説得的メッセージを
方のコンテキストによってこ
ーヘル、1980、コディ、1980)。
キャンペーン等の大規模な変

と述べることは、この論文だ
レベルでウォーヘル等(1980)
等(1980)に見出せる。この
-ぎるであろうが、これに関
った。これらの最終的結果
者たちにより提示されたコ
今後大変価値のあるもの

ストウェストセンター・コミュニ

writings, Technology Press of Massachusetts, Institute of Technology, 1956.

Woelfel, J., and E. Fink, *The measurement of Communication Processes : Galileo theory and method*, New York, Academic Press, 1980.

Woelfel, J., and A. O. Haller, "Significant others, the self reflexive act and the attitude formation process", *American Sociological Review*, 36(1), Feb., 1971.

Woelfel, J., M. Cody, J. Gillham and R. Holmes, "Basic premisses of attitude change theory", *Human Communication Research*, 6(2), Winter, 1980, pp.153-168.

Woelfel, J., R. Holmes, D. Kincaid and G. Barnett, *How to do a Galileo study*, Troy, N. Y., Good Books, 1980.

第11章

東西コミュニケー

はじめに

現代社会の交通機関やコミ
間や国家間の境界がくずれつ
化を有する国家間の接触が前
間、国家間、そして人々の間
歴史のどの時代よりも重大に

われわれは、対人間間、か
ち異なる文化の人々が、その
をも尊重できるような手段を

この論文の主な目的は次の
ションのさまざまな型を確
の基となる対話的思考の発
明すること、(4)2重円モデ
ンテキストにおけるモデル